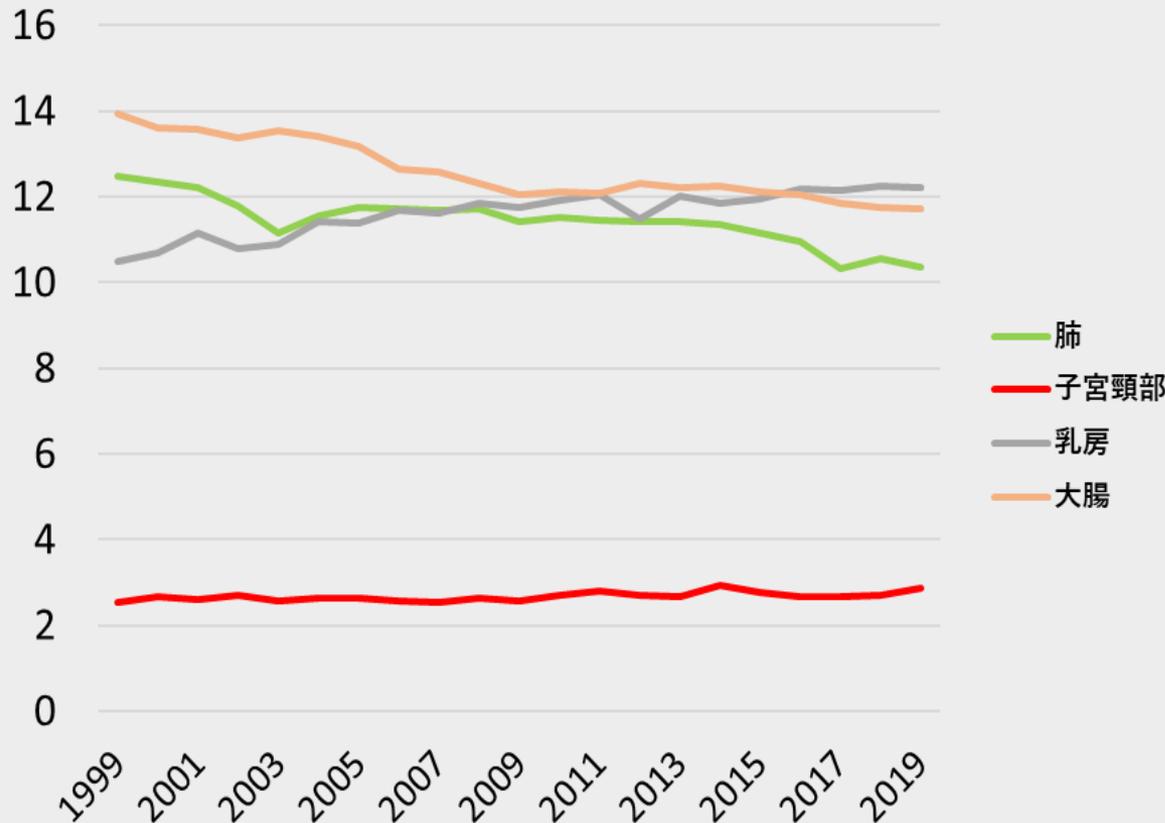


このような基本的な情報さえ、 メディア伝えてきませんでした(/o\)

年齢調整死亡率（人口10万人あたり）の推移



女性にとっては、乳癌、大腸癌、肺癌の方がずっと怖い

子宮頸癌は、検診で前癌病変で、発見できる珍しいがん

早期発見で赤ちゃんも産める

副反応疑い報告
(100万接種あたり)

HPV	355.8
4種混合	36.6
風疹	28.5
日本脳炎	23.9

えにしのHPの中

「子宮頸ガン予防？」ワクチンの部屋基礎的情報

<http://www.yuki-enishi.com/kusuri/keigan-00.html>

自己免疫性脳症を見極めるための神経徴候

要旨

一部の自己免疫性脳症と精神疾患は臨床徴候が類似することが多く、しばしば誤って診断されている。従来の神経診察法のみで正確に診断することは難しく、脳がびまん性に障害された場合の神経徴候を理解するという視点が必要である。見極めるためには詳細な問診と神経診察が重要であり、SPECT (single photon emission computed tomography)、甲状腺自己抗体ならびに抗GluR抗体測定が診断に有用である。

[日内会誌 106:1542~1549, 2017]

Key words 甲状腺自己抗体, びまん性脳障害, give-way weakness, 多発性脳血流低下, 抗GluR抗体

はじめに

自己免疫性脳症と精神疾患は臨床症状が類似することが多く、しばしば誤って診断されている。代表的な自己免疫性脳症の1つである抗NMDA (N-methyl-D-aspartate) 受容体脳症は若年女性に多く発症する脳炎だが、統合失調症様の精神症状で発症することが多く、頭部MRI (magnetic resonance imaging) で異常所見を認めない例も多い。患者の多くは抑うつ、不安等の精神症状を自覚し、まずは精神科を受診する。その後、興奮、幻覚、妄想、不随意運動等の統合失調症様の症状が出現し、その後、無反応期に移行するとされる。以前では、抗NMDA受容体脳症は急性発症の統合失調症として取り扱われてきたようであるが、医学の進歩により

精神疾患の原因が明らかになった代表的疾患と言える。加えて、統合失調症の精神症状は従来から脳のNMDA受容体機能が低下することが原因で、これら2つの疾患は原因が異なるものの、共通した病態が関与しているのではないかと考えられるようになってきている¹⁾。当初は、脳疾患が精神疾患と考えられていたという報告は多数にのぼり、精神的な症状を呈する患者の中に自己免疫的機序による器質的脳疾患が原因である患者が多数含まれている可能性は高い。我々は、過去5年で100例近くの自己免疫性脳症の症例を経験し、自己免疫性脳症をより正確にピックアップするための知見を得たので、そのポイントについて記載する。

鹿児島大学神経病学講座神経内科・老年病学

Encephalitis/encephalopathy in disorders of internal medicine. Topics : I Neurological findings to identify autoimmune encephalopathy.

Hitoshi Arata and Hiroshi Takashima : Department of Neurology and Geriatrics, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences, Japan.

荒田 仁



高嶋 博



科学部・医療部も、
学術雑誌の報告を
記事にしません

つらい後遺症が
「自己免疫性脳症」と
わかってきたのに

。。。

多様な症状が重なって、変化するのがこの後遺症の特徴
神経内科などの経験が乏しい医師には、理解不能
⇒「精神的におかしいのでは?詐病?心因性?」
と誤診。女性たちは、さらに不幸に

感覚系障害

頭痛, 四肢・全身の疼痛, 光過敏, 音過敏, 嗅覚障害, 激しい生理痛等

運動系障害

不随意運動, 脱力, 筋力低下, けいれん, 歩行障害等

認知・情動系障害

倦怠感, 集中力低下, 学習障害, 記憶障害, 相貌認知障害等

自律神経・内分泌系障害

発熱, 月経異常, 過呼吸, 睡眠障害, ナルコレプシー, 発汗過多等

マスメディアが報じない臨床家の証言

- 共通の特徴をもつ病態
多様な症状が重なって、時とともに変化
既に知られている疾患では説明しつくせない
- 自己免疫性の神経障害
そう考える理由は、
自己抗体の検出など客観的検査結果
免疫治療で改善がみられる
⇒心因性・なまけ病・気のせいではない
- 接種状況と患者発生の上に時間的な相関

被害女性を診断した 専門家たちが「自己免疫性の神経障害」 と診断する証拠は

➤ 自己抗体検査

自律神経や認知機能の働きを阻害する自己抗体が有意に増加

高橋幸利P. NMDA型グルタミン酸受容体抗体（脳脊髄液）

池田修一P・高嶋博P $\alpha 1$ アドレナリン受容体抗体等（血清）

➤ SPECT検査

大脳辺縁系、脳幹部、視床下部等の血流が有意に低下

池田修一P・高嶋博P・高橋幸利P

➤ 免疫治療

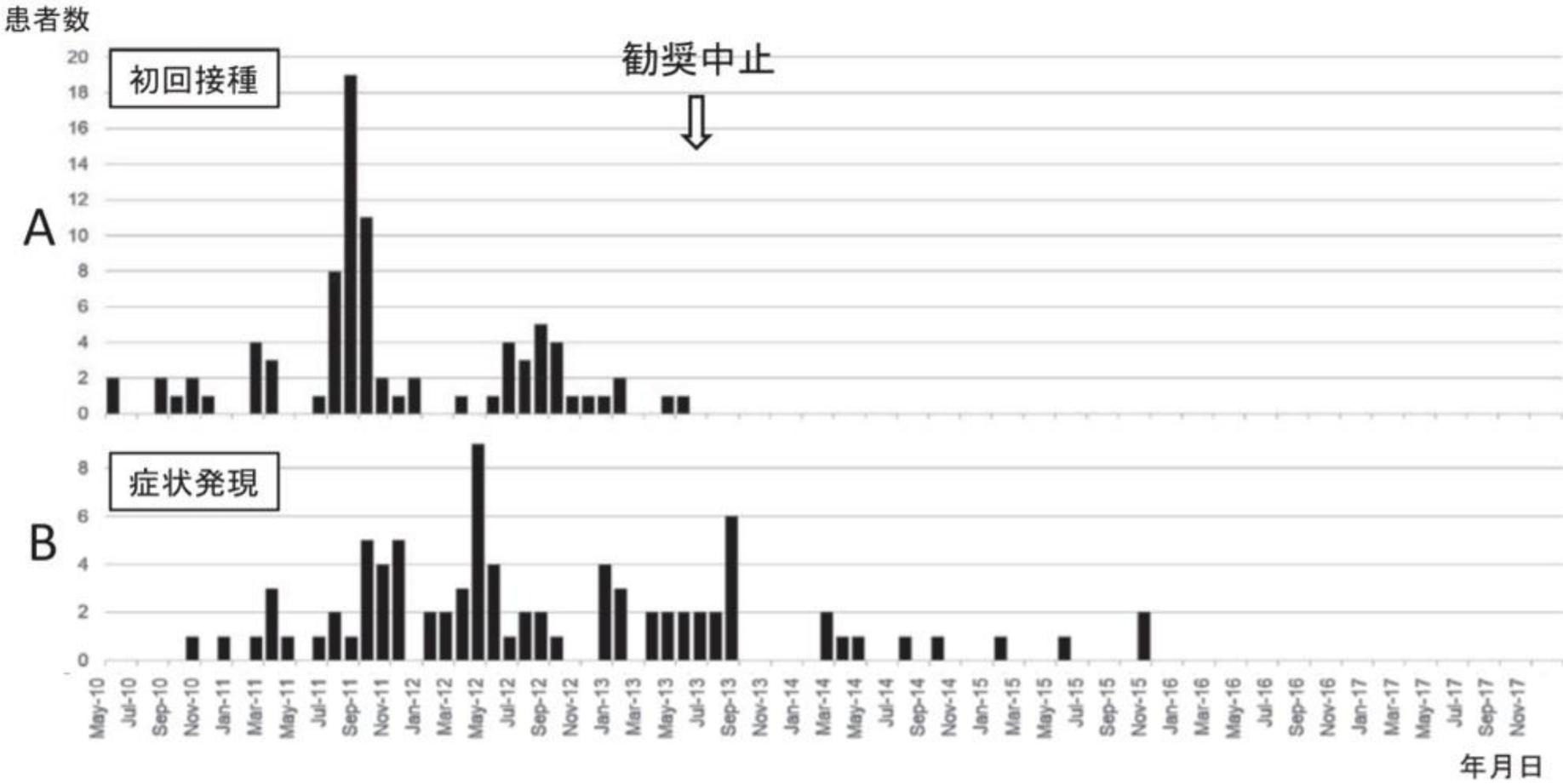
免疫抑制剤・免疫吸着療法で一定の効果

HPVワクチンの危険な成分

- ▶ **免疫を過剰に活性化**
抗原であるL1-VLPに強い免疫原性(実験論文)
アジュバントでさらに増強
サーバリックス : AS04 自然感染の10.5~27倍
ガーダシル : AAHS アジュバントなしの100倍
- ▶ **分子相同性**
L1-VLPとヒトのアミノ酸配列の部分一致多数

↓
「免疫寛容」が破綻
↓
自己免疫疾患

キノホルムをやめたら……スモンという病気がなくなりました
 サリドマイド剤の発売をやめたら……フオコメリアの赤ちゃんが激減
 ウイルスが生きている非加熱製剤をやめたら……薬害エイズは過去のものに
 矢島健康局長通知が出たら症状発現が激減……それなのに再開(▼▼)



ガーダシルの男の子への接種 大儀名分は

➤ 肛門がん予防のため

極めて稀な癌

治療法確立・多くは完治

➤ 尖圭コンジローマ予防のため

自然治癒が多い良性病変、治療法確立

➤ パートナーを子宮頸がんから守る

証明されたエビデンスがないのです

➤ 中咽頭がん予防

効果が証明されず、ワクチンとして承認されず

子宮頸がんワクチン問題～社会・法・科学(みすず書房)

第13章 「無」から生み出された市場

金銭面だけをみれば、メルク社（日本ではMSD）とグラクソ・スミスクライン（GSK）社のHPVワクチンは成功を収めてきた。

2017年、メルク社は、世界でガーダシルとガーダシル9を23億ドル売り上げ、2016年の22億ドルを上回った。

同一年、GSK社は、世界で1億3400万ポンド（約1億8600万ドル）を売り上げたが、2011年の最高売上額の5億600万ポンド（約7億800万ドル）に比べれば少なかった。

現在までに、この二つの巨大製薬会社は世界中に2億7000万回接種以上のHPVワクチンを流通させてきた。

ガーダシルは、メルク社が財務全体を健全に維持するうえできわめて重要である。メルク社の財務報告書（10-K）には、ガーダシルに未知の副反応が発見されたり、市場撤退したりすることになれば、会社全体の収支に悪影響が出ると記載されている。GSK社も同様に、サーバリックスが主力製品の一つであり、サーバリックスの売り上げは会社全体にとって重要であると記載している。

世界最大級の両社が今やその生き残りをHPVワクチンに依存しているとは、どういうことなのか。メルク社とGSK社はいかにして「無」から「市場」を生み出したのか。

（略）

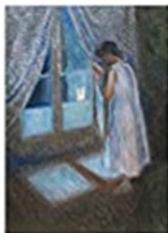
「病気のブランド化」子宮頸がんへの恐怖を売り込む

FDAがガーダシルを承認したのは、バイオックスの市場撤退から2年も経たない2006年6月だった。ところが、メルク社の消費者に向けた直接広告（DTCマーケティング）攻勢が始まったのは前年2005年9月、承認7か日前のこ

子宮頸がんワクチン問題

社会・法・科学

メアリー・ホランド
キム・M・ローゼンバーグ
アイリーン・イオリオ
別府実国監訳



みすず書房